

レモンマーケットと福祉事業

先日、アベノミクスと社会福祉についてインタビューされた。私は、「これでまた高齢者介護の世界はレモンマーケットになるでしょうね」と答えたら「???'という顔をされた。結局、発言はカットされたようだ。

レモンマーケットとは、商品の品質が買い手にわからないために、外見だけが良い不良品が出回ってしまう市場のことだ。レモンとは、英語で「お行儀の悪い女性」等の意味で使われ、経済学では、購入してみないと本当の品質が判らない商品で、「欠陥品」や「低品質の商品」が出回ることをレモンマーケットという。

例を挙げると、中古車の販売店では商品の欠陥を知っていても、まず買い手に正直に教えることはしない。買い手は品質を判断する情報が無いので高い車は買わないようになり、その結果、品質の良い中古車が市場に出回らなくなって、中古車市場は売上が低迷するといった具合。これが、「レモンマーケットの論理」だ。

未曾有の超高齢問題を抱えた日本は、もはや医療保険制度や高齢者福祉制度は破綻し、要介護高齢者の激増、長期化する介護で力尽きる人を支援するために、介護保険制度が平成12年に始まった。スタートした時は13事業だけで、けっこう質の良いサービスが提供されていた。ところが市場原理に揉まれ、利権や既得権益も関係して、今や36事業を超える私利私欲がからむ複雑怪奇な制度となった。

福祉の理念は形骸化し、携帯電話市場のようにコモディティ化が進み、何の特徴のないサービスばかりが並ぶようになった。「コンクリートからヒトへ」というスローガンを失くした福祉行政は、利権と心ない経営者の懐を潤すレモンマーケットになりつつある。

私の周囲にいる、「正直者の福祉事業経営者」は大抵が貧乏で、行政や金融機関からイジメられる対象だ。行政に保護してもらいたいが、その保護政策自体がレモンになっている。我々は消滅する運命なのだろうか。消滅する前に種を思いっきり撒き散らそうと、ここでお喋りを続けているわけだ。